



大地震の被害を乗り越えた鉄道が 地域復興のシンボルとして『元気』を運ぶ

能登半島の中間部を走る“のと鉄道”は、2024年の元日に発生した地震で大きな被害を受けたが、復旧に向けた迅速な調査やさまざまな人々の支援が後押しとなり、約3カ月で全線復旧を果たした。時には牙をむく自然と共存し、その恵みを享受しながら、今日も地域の復興を支えている。

文・写真 伊原 薫 (鉄道ライター)



能登鹿島駅に停車する車両。「がんばろう能登」のヘッドマークが力強い



車窓の手前には田園風景が広がる

た。これに対し、地元自治体や石川県は能登地域の維持発展に能登線が必要であると、第三セクター方式での鉄道存続を企図する。こうして設立されたのがのと鉄道で、1988年に能登線を引き受ける形で開業。1991年には七尾線のうち七尾・輪島間を、線路等の施設をJR西日本の所有としたまま運営する第2種鉄道事業者として引き継いだ。

こうして、のと鉄道は営業距離が合計110km超という日本有数規模の第三セクター鉄道となった。しかし、利用者の減少に歯止めがかからず、2001年には七尾線の穴水・輪島間の廃止に続き、4年後には能登線もその役目を終えた。現在は、七尾・穴水間で運行を続けている。



中田哲也代表取締役社長

特急列車を走らせている。その先もしばらく平坦な区間が続き、時おり海が見えた。各駅のホームにはホーローでできた駅名標が残っていて、ノスタルジーを感じさせる。

能登中島駅から先は峠越えの区間で、エンジンを唸らせながらゆっくりと坂を上っていく。前方を眺めていると、レールの下に敷かれたパラストが、徐々に茶色からグレー混じりとなっているのに気付いた。能登半島地震で被害を受け、補修が行われた証である。後で知ったのだが、一部区間は補修工事後間もないため、列車の速度を落としているようだ。

一駅ごとに乗客が少なくなり、車内も静かになっていく。七尾駅から45分ほど、定刻に穴水駅に到着。最後まで残っていた10人ほどの乗客が徒歩や迎いの車で家路につく傍ら、何人かの高校生が折り返しの列車へと向かう。何とこの日常の風景だが、いまだ復旧工事中の駅舎や駅前広場が“日常”というものの尊さを物語っていた。

高校生でにぎわう車内

梅雨入り間近となった6月のある日、七尾駅でのと鉄道のディーゼルカーに乗り込んだ。2両編成の車内は、夕方ともあって制服姿の学生たちで座席が埋まっており、あちこちで元気な笑い声が聞こえる。その数、ざっと80人。これを見ても、鉄道が地域にとって不可欠であることを確信させてくれる。

やがて時間になり、静かに発車。隣の和倉温泉駅までは電化されており、JRも

■のと鉄道路線図



困難が続いた能登の公共交通

石川県北部に位置する能登半島。加賀百万石と称され、一大勢力を誇った加賀藩は、織田信長に仕えた加賀前田家初代当主の利家が能登国を与えられたことに端を発している。海外にも広く知られている輪島塗は、歴史をたどれば縄文時代にさかのぼるとも言われており、古代からこの地が栄えていたことがうかがえる。海産物に恵まれ、海上交通の要衝であることも、地域の発展を支えた。

その一方で、能登半島の陸地部分は険しい山々が多く、陸上交通は脆弱だった。七尾までは明治期に鉄道が建設さ

れ、大正から昭和初期にかけて徐々に延伸。1932年には穴水まで、その3年後には輪島まで開業した。これによって能登半島を南北に結ぶ鉄道が完成したものの、さらにその先、珠洲方面は沿線人口が少ないことなどから、戦後しばらくして建設に着手。穴水・蛸島間が能登線として全通したのは、1964年のことだった。ちなみに、最後に開業した松波・蛸島間は、鉄道・運輸機構 (JRTT) の前身である日本鉄道建設公団が初めて手掛けた路線の1つでもある。

だが、自動車の台頭により能登線の利用は振るわず、全線開業の4年後には早くも廃止が取りざたされるようになっ



夕暮れの和倉温泉駅

のと鉄道株式会社

- 設立 1987年5月1日
- 区間 七尾線 (七尾・穴水) 33.1km ※第2種鉄道事業
- <https://nototetsu.jp/>

甚大だった被災状況



のと鉄道沿線は震源地に近いこともあり、被害は甚大だった。線路の曲がりや切断、土砂流入、駅施設の損壊などの被害が確認された。(写真提供：のと鉄道)

地震による被害が全線に及ぶ

沿線人口の減少や少子高齢化により、のと鉄道の利用者数は減少傾向が続いた。2015年には北陸新幹線の金沢延伸をきっかけに誘客を図るため、観光列車「のと里山里海号」の運行を開始。冬季には穴水駅の跨線橋で、車両を見ながら焼き牡蠣が食べられる「あつあつ亭」を営業するなど、さまざまな利用促進策を展開してきた。能登エリアの観光ツアーに、のと鉄道が組み込まれることも次第に増え、コロナ禍でいったんは落ち込んだものの、2023年度は回復基調にあった。

そのさなか、2024年の元日に発生した能登半島地震が、のと鉄道を危機に陥れる。

「当日、私は輪島市内の自宅にいました。会社の状況が気になったものの、自宅や周辺も被災しており、その対策や救助で手いっぱいだったため、駆けつけることはできませんでした」と、中田哲也代表取締役社長は当時を振り返る。「翌朝早くに出発したのですが、あちこちで道路が寸断されており、いつもなら30分弱の道のりが5時間かかりました」

全線にわたって被害を受けたほか、本社も大規模損壊のため立ち入り禁止に。停電や通信網の途絶、余震の影響もあり、数日経っても被害の全容がつかめない状態だった。

「そこで、国土交通省や施設所有者であるJR西日本とも協議のうえ、JRTTの『鉄道災害調査隊』という制度を活用させていただくことにしました。当社単独ではノウハウに乏しく、何から手を付ければよいのか戸惑う状況の中、とても迅速に対応していただけたのはありがたかったです」(小林栄一常務取締役)

発災から1週間が経過した1月9日から2日間にわたり、JRTTの職員7人がのと鉄道を訪問。被害状況の調査や復旧方法のアドバイスなどを行った。鉄道災害調査隊の派遣は5例目だったが、メンバーの1人である鉄道企画調査部鉄道総合支援課の目黒靖人課長補佐によると、これまでにない苦労を伴ったという。

「過去の事例は大雨や台風の被害に対するものであり、被災箇所がある程度限られていましたが、今回は地震ということで広範囲に被害が及んでいました。また、余震が続く中での調査となるため二次災害防止に留意する必要があるほか、現地への往復などにもかなり苦労しました」

スムーズな連携で早期復旧を実現

調査の結果、27地点で約50の被害が確認された。なかでも震源地に近い能登鹿島・穴水間では、盛土の沈下やトンネルのひび割れなどが発生。穴水駅も駅舎の損壊やホームの屋根が傾くなど、大きな被害が見られた。全容を把握した段階で、中田社長は「いくら急いでも夏休み中の復旧は難しい」と感じたという。

「ただ、橋りょうが流出したりトンネルが崩落したりといった、致命的な被害が見られなかったのは不幸中の幸いでした。早期に全容

活躍したJRTT「鉄道災害調査隊」



1月9日から和倉温泉・穴水間 28.0kmに、要請を受けたJRTTの「鉄道災害調査隊」や国土交通省鉄道局職員などから成る専門家チームが入り、被災概況調査を実施した。この調査をもとに復旧への方法やそのための技術的な助言が行われ、早期の復旧に貢献した。

懸命な復旧作業



地震から間もなく、社員らは穴水駅に留置中の車両で寝泊まりしながら復旧作業を開始した。利用客の大部分は通学目的の学生だ。「新年度、新学期に間に合わせたい」。復旧に関わったすべての人がこの目標に向かい、作業に取り組んだ。(写真提供：のと鉄道)

が把握できたことで、『なんとかしても1日も早く復旧させる』と、全社員の思いが一丸となりました」(中田社長)

「復旧工事は1月末から本格的に始まりました。周辺の道路事情などもあり、基本的には七尾方から工事を進めていきましたが、穴水方のうち被害が大きかった箇所も先行して着手することができました。近隣住民の皆様や、国土交通省の道路・河川部門からもご協力をいただくことができ、仮設道路の用地や資材、残土置き場の確保などをスムーズに進められたのも、工期短縮につながりました」(小林常務)

2月15日には七尾・能登中島間の工事が完了し、この区間に残り残されていた車両を使って臨時ダイヤでの運行を再開。残る区間の工事も順調に進み、4月6日に全線復旧を果たした。

「学校の新学期に間に合わせることができ、ホッとしています。一部区間は仮復旧のため、速度を落として運転していましたが、7月20日より通常ダイヤでの運行を再開しました」(中田社長)

「鉄道の早期復旧は、地域の復興に直結します。過去事例のノウハウを持つ

早期復旧が実現

2月15日に運行が再開された七尾・能登中島間に続き、4月6日には、能登中島・穴水間が復旧し、約3カ月ぶりに全線で運行を再開した。穴水駅では記念の出発式が開催され、約3カ月ぶりに出発する七尾行きの一列車を、地元住民や関係者らが復興への期待を込めて見送った。

(写真提供：のと鉄道)



我々がお手伝いすることで迅速な復旧を後押しするとともに、第三者の立場で工事内容や費用の判断が行え、国や自治体からの支援に弾みをつけられると考えています。今後も地域鉄道に寄り添い、安定した運営につなげていきたいと思えます」(JRTT目黒課長補佐)

取材を終えた帰り道、能登鹿島駅に立ち寄ると、ホームに「ありがとう！頑張ります」と書かれた看板を見つけた。誰が設置したものかは分からないが、のと鉄道と地域がお互いに声を掛け合い、支え合おうという決意の表れに見えた。8月からは、能登の子どもたちを元気づけようと、「のと鉄道POKÉMON with YOUトレイン」の運行を開始。きっと笑顔が戻ることだろう。

西岸・能登鹿島間を走行する列車 背後は七尾湾

